

(英語版)

(アラビア語版)

令和四年三月

SF小説…「新・ナクバの東」(十)

第一部…「イスラエル、イラン核施設を空爆す」

十・ナタンズ爆撃(四)



「作戦成功!」。「エリート」は小さくしかし興奮に震えた声で本部基地に伝えた。基地で司令官以下の幹部が快哉を叫ぶ姿が目に見えるようであった。<親父もきつと喜んでいるに違いない>中東戦争の勇士と称えられ、はるか遠くにあつた父親の背中が少し近くなつたような気がした。これで無事に帰還すれば正真正銘の「エリート」になれると彼は確信した。

ナタンズ爆撃作戦は結局バンカーバスター五発を撃ち込んで終了した。「アブダラー」機にはまだ左翼にバンカーバスター一発、そして胴体下部に小型核ミサイル一発を残していた。しかし異変に気付いたイラン空軍の戦闘機がイスファハンを緊急発進していることは間違いなく、現場に長くはとどまっていられない。二発のミサイルを抱いた「アブダラー」機を含む三機は急上昇しイラン領空外へと向かった。リーダーはイスファハンの空軍基地を発進したイラン機がすぐ後ろに迫っていることを示していた。

イラン機が国籍不明機を発見したのは、既にイスラエルの3機がナタンズ爆撃は終わった後だつた。イラン空軍にはAWACSのような優秀な早期警戒機もなければ、防空レーダー網も貧弱である。さらに彼らが保有している戦闘機は一時代前のもので性能も劣り俊敏でステルス性能を持つたF35に遠く及ばない。結果的にイラン機は緊急発進したものの、空爆を阻止できなかったばかりでなく、F35に追いつくこともできず、彼らをやすやすと領空外に逃亡させただけであつた。

イランからイラク領空に戻った三機は往路のルートを逆にたどり基地に帰還するだけである。燃料計は既に四分の一以下になっており自力での帰還は難しいが、途中まで空中給油機が迎えに来る手はずになっており何も心配することは無い。……はずである。

しかし基地の指令は思わぬものであった。三機に対して進路を南に変更しペルシャ湾上空をホルムズ海峡に向かえ、と言うのである。三人のパイロットは我が耳を疑った。

(続く)

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

荒葉一也

Arehakazuya1@gmail.com